

Fact Sheet

共立女子職業学校・私立女子美術学校・私立女子商業学校・ 本郷女学院の設立と展開 ①

1. 裁縫・美術・商業と明治の女子教育：三校の設立

明治維新は、建前上、身分による職業選択の制限を消滅させたが、男女の区別については江戸期以来の慣習が残った。明治28(1895)年に至っても、女性に適するとされる職業は、教師・看護婦・産婆・手芸・養蚕・美術などであった(『婦人と職業』、民友社)。ただし以後、医師になるものも現れて医歯薬系の職域が開かれ、また、高度な教育を受けた女性にとっては、教師は職種として重要な位置を占めるようになる。本展で取り上げる四校のうち、明治期に起源をもつ三校(共立女子職業学校・私立女子美術学校・私立女子商業学校)は、この状況下で設立された。

共立女子職業学校は、明治19(1886)年、女性の就業に必要な技芸の教育を目的に設立された。裁縫科を持つ最初期の中等教育機関でありながら10学科以上が置かれ、教育内容は幅広い。明治20(1887)年には東京府は同校を裁縫を教授する高等女学校と分類したが、明治27(1894)年の徒弟学校規程によれば徒弟学校であり、明治32(1899)年の実業学校令以後は乙種実業学校の一種であったと考えられる。初等教育後に、裁縫・飾帽・編物・刺繍・図画等を教授する実業教育機関であった。

私立女子美術学校は、明治33(1900)年、女性に美術教育を施し自活と社会的地位向上の道を開くこと、さらに各種の女学校における美術教師を養成することを目的に設立された。東京美術学校に並ぶ教育内容を目指し、初等教育を終えた者が進学する普通科(高等女学校に相当)、普通科卒業者や高等女学校卒業者を受け入れる高等科、及び1年の撰科、2年の研究科が設けられている。高等科・研究科は専門学校に相当する高等教育機関であり、同年に設立された女子英学塾(津田梅子設立)や東京女医学校(吉岡彌生設立)と同様、専門性を強調した高等教育を通じて職業への道を開くことが意図されていた。

私立女子商業学校は、明治36(1903)年、商業界を志す女性に実用に適する学科と商業道徳を教授すること、また家庭にあって女性が本分を発揮できるよう商業教育・普通教育を行うことを目的に設立された。女子教育の一環として簿記などを教える学校はこれ以前にも存在したが、商業教育を中心とすることにより、高等女学校や裁縫学校との差異化が図られている。

2. 中等教員への道

裁縫・美術・商業という専門に根ざした三校の試みは、社会の動向に即して展開していくことになる。現実的には、中等以上の教育をうけた女性の職業として需要と社会的地位が見込まれたのは中等学校教員であり、教員養成への対応が学校の動向を左右した。教員検定には無試験検定と試験検定があり、前者は官立の専門学校以上の卒業者に適用されていたが、明治32年(1899)年以降、文部省の認定した私立学校の卒業者も対象となった。試験検定は難関であり、無試験検定のもつ意味は大きかった。

(裏面につづく)

独立行政法人 国立女性教育会館

Fact Sheet

共立女子職業学校では、教員を目指す者が多かったことから、明治31(1898)年に裁縫教員養成科を設け、さらに明治42年(1909)年設置の受験科の卒業生については、中等教員検定の受験資格を得られるよう認定を得た。また、明治44(1911)年には、高等女学校卒業者を対象に、専門学校相当の甲科高等師範科を新設したが、同科には裁縫・手芸の中等教員無試験検定取扱が認められた。明治32(1899)年、女子の初等・中等教育に裁縫科が加えられて以来、裁縫科の中等教員の需要は高まっていた。

十代半ばの島田依史子は、中等教員を目指す小学校教員経験者たちとともに乙部受験科に学び、大正8(1919)年に卒業して中等教員検定の受験資格を得た。次いで試験に合格すると、大正13(1924)年には島田裁縫伝習所を開設した(翌年、本郷女学院と改称。昭和2(1927)年、各種学校として認可を受け本郷家政女学校)。共立女子職業学校は女子の職業教育機関の第二世代の担い手も育てた。

教員養成課程を強化する一方、共立女子職業学校は、明治45(1912)年、高等女学校の卒業者等を対象とする「家庭婦人養成コース」として家庭科を設けた。同科主任は、学校設立の発起人の一人でもあり、妻・母として女性の模範となりうる人物、鳩山春子が務めた。「花嫁学校」のさきがけともいえるこの科は、高等女学校の課程には家庭に入る準備が不足しているとの批判に応じて設立され、1930年代以降、卒業者数を高等師範科や受験科に勝る勢いで増加させていった。

私立女子美術学校(大正8(1919)年、女子美術学校と改称)は、女性向けの美術教育が社会的に容認されていなかった時代背景もあり、創設当初より、日本画科・西洋画科を中心とする経営は実現せず、需要の大きい裁縫科・手芸科に依存する状態が続いていた。一方、卒業生に検定試験を受けて中等教員となる者も多いことから、同校は無試験検定の認可を受けることを目指し、高等師範科を設けて準備を行った。

無試験検定でも絵画科は立ち遅れ、最初に認可を得たのは刺繍科・造花科であった(大正4(1915)年)。生徒数や卒業生数の多い裁縫科が認可獲得に失敗したために、同科の主任は退職願を出している。裁縫科には大正10(1921)年に無試験検定が認可され、次いで日本画科・西洋画科がこれに加わった(大正13(1924)年)。絵画科の無試験検定認可以降、同校は美術教員の供給源としての地位も安定させていく。

私立女子商業学校(明治40(1907)年、私立日本女子商業学校と改称。大正8(1919)年、日本女子商業学校と改称)も、設立当初は入学者が見込めず、商業を校名から外すことも検討された。そこで、生徒側の需要に合わせて裁縫普通科を置き、夏期講習では、英文商慣習、商用文購読など商業に関わる題材のほか、実用染色法・配色法、ミシン使用練習なども取り上げ、生徒数の拡大に成功した。昭和4(1929)年には高等科を専門学校令による日本女子高等商業学校とし、卒業生は計理士の無試験登録の資格を得ることとなった。昭和8(1933)年11月には本科卒業生に実業教員無試験検定が認められた。こうして、商業教育機関という特徴を生かしながら、卒業生に中等教員という職域を開く道が作られた。

(東京大学大学院総合文化研究科准教授・岡本拓司)

独立行政法人 国立女性教育会館

女性の実業教育のはじまり
〜チャレンジした女性たち〜

Fact Sheet

共立女子職業学校・私立女子美術学校・私立女子商業学校・ 本郷女学院の設立と展開 ②

3. 各種学校から専門学校・高等女学校・実業学校へ

裁縫・美術・商業といった特異な力点をもつ四校は、当初、拘束の少ない各種学校という形態の強みを生かし、多様な工夫を試みることで成長を遂げた。一方、高等教育機関に学ぶこと自体に意義を認める女性は増え続けており、諸学校は、高等教育機関を自ら設けること、或いは高等教育に進む道を開くことによりその要求に応えていくこととなる。この努力は、学校側にも、多様な特典と安定した地位をもたらすこととなった。

共立女子職業学校は、大正10(1921)年、職業学校規程に基づく設置認可をうけ、次いで大正14(1925)年、高等師範科を専門学校令に基づく専門学部とした。また同時期、乙部受験科や本科(甲乙の別を廃した)は中等学校程度の実業学校に昇格し、高等女学校同様、卒業生は専門学校の入学資格を得られることとなった。昭和3(1928)年には、専門学部は共立女子専門学校として独立し、昭和10(1935)年には、普通教育を行う共立高等女学校も設立された。

私立女子美術学校は、大正4(1915)年に付属高等女学校(翌年、私立佐藤高等女学校と改称)を設立した。それ以前にも高等女学校の課程に相当する部分は存在したが、各種学校であったために卒業生は高等女学校卒業者と同等の資格は得られなかった。付属高等女学校を設けることにより、この点の不利は解消された。女子美術学校自体は、昭和4(1929)年に専門学校令に基づく女子美術専門学校に昇格した。

日本女子商業学校は、大正10(1921)年、本科卒業者を、専門学校の入学に関して高等女学校卒業者と同等以上の学力を有する者と指定させることに成功し、昭和13(1938)年には実業学校令に基づく学校となった。昭和4(1929)年には、姉妹校として、専門学校令に基づく日本女子高等商業学校が設立されている。

(裏面につづく)

女性の実業教育のはじまり
― チャレンジした女性たち ―

Fact Sheet

以上の三校に対し、島田がほぼ独力で運営した諸学校は、戦前には専門学校への道を開くまでの段階にとどまったが、その展開は生徒側が必要としたものをよく反映している。昭和2(1927)年に各種学校の認可を得たのは、遠距離通学者の、通学乗車料割引証の発行の希望に応えるためであった。生徒に専門学校への進学を望む者が現れると、島田は、本郷家政女学校とは別に、昭和6(1931)年に甲種実業学校の十佳女子高等職業学校を設立し、その卒業者が専門学校に入学できるようにした。また、生徒の動向に応じて商科を充実させた(本郷家政女学校は昭和9(1934)年に本郷商業家政女学校と改称)。

以上の通り、職業に直結する女子教育機関として発足した四校は、女性の就業状況の変化や、中等教員や中等・高等教育機関に関わる制度の変遷、女性の進学熱の高まりに適応しながら教育内容や学校の形態を変化させ、戦前期に一定の成功を収めていった。

(東京大学大学院総合文化研究科准教授・岡本拓司)

参考文献(文中で明示したものを除く):

女子美術大学編『女子美術大学八十年史』(女子美術大学、1980年)

共立女子学園百年史編纂委員会編『共立女子学園百年史』(共立女子学園、1986年)

嘉悦学園90年史編纂委員会企画編集『嘉悦学園のあゆみ:九十周年を迎えて』(嘉悦学園、1993年)

『文京学園75年史』(文京学園、1999年)

佐々木啓子『戦前期女子高等教育の量的拡大過程:政府・生徒・学校のダイナミクス』(東京大学出版会、2002年)

土方苑子編『各種学校の歴史的研究:明治東京・私立学校の原風景』(東京大学出版会、2008年)

女性の実業教育のはじまり
〜チャレンジした女性たち〜

独立行政法人 国立女性教育会館